



Title	半蔵門ミュージアム所蔵（醍醐寺旧蔵）如意輪觀音菩薩坐像について
Author(s)	町田, 大悟
Citation	待兼山論叢. 芸術篇. 2025, 58, p. 1-32
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100916
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

半蔵門ミュージアム所蔵（醍醐寺旧蔵）如意輪観音菩薩坐像について

町田 大悟

キーワード：醍醐寺／如意輪観音／半跏思惟像／貞崇

はじめに

京都府京都市山科・笠取山に展開する醍醐寺は、理源大師聖宝（八三二～九〇九）が貞觀年間（八五九～八七七）に開いた草庵を端緒とし、延喜七年（九〇七）に醍醐天皇の御願寺となつた。聖宝没後は、弟子の觀賢（八五三～九二五）が後を継ぎ、延喜十三年（九一三）に薬師堂・五大堂が完成し定額寺に列せられ、大寺院へ発展を遂げた。⁽¹⁾また、聖宝は自刻の准胝觀音像、如意輪觀音像を安置したとされ、当寺では如意輪觀音が篤く信仰されてきた。

表題の木造如意輪觀音菩薩坐像（以下、本像、挿図1）は、長らく醍醐寺に伝来していたが、二〇一九年に東京・真如苑の所蔵となり、二〇二三年に保存修復作業を終え半蔵門ミュージアムで公開された。

日本における如意輪觀音の造形は、『觀自在如意輪菩薩瑜伽法要（瑜伽法要）』等に依拠し、空海が請來した原団胎藏曼荼羅にあらわれされる、六臂の姿で左脚を横たえ、右膝を立てて右足で左足裏を踏まえる「輪王坐」の坐法が通

例である。⁽²⁾しかし、本像は六臂ながら右足首を左腿に乗せ、左脚を垂下させる半跏思惟形に近い特殊な坐法をとる。この姿は本像の他に兵庫・神呪寺如意輪觀音菩薩像が同様の坐法であつた可能性が指摘されるのみで、特異な図像表現である。⁽³⁾

本像は、その特殊な図像表現とともに醍醐寺に伝来する作例の中でも制作が十世紀に遡るものとして注目を集めてきた。しかし、近世以前の伝来が不明な上に、その図像表現に類例がなく、研究者の間で共通の見解があるとは言い難い。

そこで、本稿では、本像について様式比較から制作年代を推定し、六臂半跏形という特殊な像容について、誰が造像を主導し、どこから着想を得たかという問題について考察する。また、その中で、いわゆる半跏思惟像が思惟手の印相を介して如意輪觀音とみなされた可能性について述べたい。

一 作品概要

まずは、本像に関する基本的な情報を確認する。像高九七・一cm。螺髻を結い、正面で上・下二段を元結で括る。天冠台（紐二条・列弁・花形）を戴く。天冠台下の髪は現状毛筋彫とし、天冠台上の髪は粗い毛筋彫とする。現状、白毫はあらわさない。耳朶は環状貫通。三道をあらわす。条帛、裙、腰布を着ける。頭部は僅かにうつむけ右に傾ける。右第一手は右膝に肘をつき、五指を握り、第二指第一関節を頬に当てる。同第二手は垂下し、膝の外側で数珠を執る。同第三手は屈臂し、腹前で宝珠を掌上に載せる。左第一手は体側に垂下、伏掌し、光明山を掴む。同第二手は側方で屈臂し、肩外付近で指先に輪宝を立てる。同第三手は胸前で掌を正面に向け蓮枝を執る。岩座に腰をおろし、

左脚を垂下させる。右脚は足の甲を左大腿部半ばに置き、膝頭を持ち上げる。装身具は銅製の腕釧をつけ、臂釧は彫出するが、当初部の列弁は削り落とされる。

体部右前方に木芯を込めたカヤの一材より頭体幹部から右脚の大半、左脚膝頭前までを彫出し、右足先を含めた左脚膝以下、右膝頭に別材を矧ぐ。頭部は後頭部から内刳りを施し、蓋板を当てる。体部の内刳りは背部と腰部の二箇所から施し、各開口部に蓋板を当てる。内刳は内部で貫通し、像底に及ぶ。髻は上下の元結の間に方形の窓を開け、その中に舍利容器を納め蓋板を当てる。⁽⁴⁾ 右第一手の肘より先、同第二手の前膊半ば、手首以下、同第三手の肘より先に別材を矧ぐ。左第一手は手先および光明山までを体幹部と共に木で彫出し、同第二・三手は肩以下で別材を矧ぐ。像底に別材を当てる。なお、体幹部材には節があり、用材は必ずしも良材とは言えない。

保存状態は以下の通りである。髻正面および後頭部の蓋板、天冠台上部の毛筋彫、天冠台（後補の四材を寄せる）、瞼の刻み、背面に当たった蓋板のすべて、左第一手腋下の小材、左第二・三手の肩以下、右第一手の前膊半ばより先、右第二手の手首以下、右台三手の肘より先、右足先を含む左膝頭以下、像底に当たった材、化仏、腕釧のすべて、右第三手の臂釧、持物のすべてを後補とする。また、髪際は木屎漆で塑形し彫り直しており、眼窩や小鼻、上唇にも補修が認められる。⁽⁵⁾

このように、当初の造形をとどめるのは、体幹部と横たえた右脚、右足先を載せる左大腿部、垂下して岩座に掌を伏せる左第一手である。しかし、頭部を右に傾ける体勢や六臂の姿、右足先を左大腿部に載せ左脚を垂下させる六臂半跏形など、図像の根幹に関わる点においては当初の造形を伝える。

二・先行研究と問題の所在

本像は、主に制作年代、図像解釈と造像に関わった僧侶について検討が重ねられてきた。以下に先行研究を確認した上で検討すべき問題点を明らかにする。

（1）制作年代

安藤更生氏は、本像を承和期の作例よりも落ち着いた作風を示すと評価し、制作年代は「藤原中期をくだらないもの」と推定された。⁽⁶⁾ また、佐和隆研氏は本像の構造に注目し、頭体を一本から彫出し、深い内刳りを施す点から、平安中期にまで遡りうる作例と判断された。井上一稔氏は、本像の細身で伸びやかな造形が、延喜十三年（九一三）年以前の制作とみられる醍醐寺五大堂大威徳明王像（挿図2）に通じることから、制作時期は五大堂創建期まで遡る可能性を指摘された。⁽⁸⁾ 副島弘道氏は、本像の細身ながら氣宇を感じさせる造形が天徳年間（九五七～九六二）に制作された醍醐寺千手觀音菩薩像（挿図3）の姿と異なるとし、十世紀前半の制作であつたとされた。⁽⁹⁾ 一方で、水野敬三郎氏は、本像の制作が十世紀後半に下る可能性を示された。⁽¹⁰⁾ 近年、杉田美沙紀氏は井上氏の指摘に加え、本像の衣文表現が延喜十三年（九一三）以前の制作とされる醍醐寺薬師三尊像脇侍像（挿図4）に類似するとして制作年代が十世紀初期にさかのぼる可能性を示された。⁽¹¹⁾

(2) 図像表現と造像に関わった僧侶

本像の図像表現について、安藤氏は平安時代後期以降に二臂の半跏思惟像が如意輪観音とされる中で、六臂像にまで半跏形の図像が浸透した可能性を指摘されたほか、宋代彫刻の影響の可能性を指摘された。⁽¹²⁾ 石川知彦氏は、特異な像容の発現には聖宝が関与し、金峯山寺に安置された如意輪観音菩薩像の造形が及んだ可能性を示唆された。⁽¹³⁾ 清水紀枝氏は、本像の造形について、『醍醐寺新要録』中の上醍醐如意輪堂本尊が二臂像であった記述に注目された。加えて、石山寺本尊像が如意輪観音として認識されるにあたって、醍醐寺僧が関わったことから、醍醐寺では石山寺系の二臂像を如意輪観音とみなす伝統があつた可能性を指摘し、同様の如意輪観音の造形を受けて本像が誕生したとされた。また、本像の誕生には、石山寺に住し、当寺の密教化に寄与した醍醐寺僧淳祐が深く関与したとされた。⁽¹⁴⁾ 杉田氏は、本像の坐法は輪王坐の如意輪観音の造形と七世紀の左足を踏み下げ思惟する形を組み合わせたものであるとし、本像の図像が「意楽（儀軌に説かれない図像を作り出すこと）」であり、図像に精通した僧侶が関わった可能性を想定された。⁽¹⁵⁾

以上をまとめると、制作年代については、おおむね十世紀とするもののその中で開きがある。また、図像表現および造像に関わった僧侶について見解の一致を見ておらず、これらに検討の余地があると考える。次章では、本像の制作年代について検討を行う。

三・制作年代の検討と造形的特徴

(1) 制作年代の検討

まずは、先行研究の指摘を検証しながら制作年代を考えてみたい。

本像の腕が細長くあらわされる点は、醍醐寺五大堂大威徳明王像に類似する。⁽¹⁶⁾ 加えて、肩幅を広く取つて腰を絞り込み、腹の括り線を明瞭にあらわして下腹部にかけて肉身の厚さを増す形には、延長三年（九一五）以前の制作とみられる醍醐寺中院伝来五大明王像（挿図5）をはじめとした十世紀第一四半期の作例との類似性が見いだせる。ただし、全体に肉感を減じて細身に上半身をあらわす特徴は、醍醐寺千手觀音菩薩像に近似していることも看過できない。

本像の衣文は両端が鎬だった帶状を呈し（挿図6）、醍醐寺藥師堂藥師如來脇侍像の衣文が紐状だが丸みを帯びている点で相違が認められる。一方で、中院伝来五大明王像のうち、軍荼利・大威徳両像の脚部には帶状で両端が鎬だった衣文があらわされるが（挿図7）、帶状の衣文を部分的に採用する中院伝来諸像に対して、本像はそれを全体にあらわす点で形式化が認められる。

帶状の衣文が全体に配される造形は貞元二年（九七七）頃の制作とされる六波羅蜜寺藥師如來像にも認められるが、本像は脚部の立体感を強くあらわしている。この造形は醍醐寺藥師堂藥師如來像や十世紀前半の制作と考えられる醍醐寺帝釈天像（挿図8）に近い造形を示しており、六波羅蜜寺像よりも先行する作例であると考える。ただし、醍醐寺帝釈天像は、これまで醍醐寺藥師堂や五大堂といった草創期の作例に近似するとみなし、十世紀第一四半期の作と見られてきたが、翻波式衣文をあらわさない点や全体に四角張つた肉取りに藥師堂諸尊よりも時代の下る要素が

認められるため、制作年代については再考の余地があると思われる⁽¹⁸⁾。この問題については稿を改めて検討したい。

また、本像は近年の修理により、面部および三道、上半身において後補の木彫漆が除去された。新たに出現した面部にも補修の跡があり、保存状態に留意する必要はあるが、三道の盛り上がった表現は十世紀後半の制作と考えられる醍醐寺胎藏大日如來像（挿図9）との類似が見いだせる。また、なで肩で腰の括りを曖昧にあらわす点や低い垂髻に持つ点で、本像は胎藏大日如來像と共通する特徴を有する。ただし下ぶくれの輪郭は延長三年（九二五）以前の制作とみられる醍醐寺清瀧宮伝來如意輪觀音菩薩像（挿図10）にも共通する。胎藏大日如來像より先行する作例と考えられる。

以上の事を総合すれば、本像の造形は、全体に十世紀第一四半期、特に醍醐寺中院伝來諸像に近い造形感覚を示す。ただし、全体に肉感を減じた身体表現および浅く形式化した衣文表現に十世紀中頃以降の作例にも連なる要素が認められるため、制作年代は十世紀前半、主に第二四半期頃と考えるのが穩当と思われる。

（2）造形的特徴

本像の特徴的な造形として、まず挙げられるのは左第一手の位置である。多くの作例の場合、光明山を蓮華座上にあらわし、像の地付よりも高い位置にあらわす。しかし、本像は光明山を像の地付よりも下に配しており、手と共木で彫出する。踏み下げる脚部に別材を矧ぐことを思えば、台座は当初より別製で、岩座（光明山）上に坐すかたちであつたと見られる。

また、本像は右第一手にも特徴がある。当該の手は、前膊半ばからななめに後補材を矧ぎつけるものの、前膊まで含めて当初の姿を留める左第一手の長さから考えて、当初の形をほぼ踏襲しているとみられる。すなわち、本像は当

初から手の甲側を頬に当てる思惟手であったと考えられる。

如意輪觀音の作例では、思惟手には五指を舒ばし掌を頬に向けるものと、掌を下に向け手の甲側を頬にあてるもの二系統が存在し、本像に先行する作例では、原団胎藏曼荼羅をはじめ開掌の思惟手とするものが多い。一方で醍醐寺では、唐代の制作とみられる線刻如意輪觀音鏡像や清瀧宮伝來像は掌を内に向ける思惟手とする。すなわち、現団系とは異なる思惟手が初期醍醐寺において採用されていたとみられ、本像の思惟手も醍醐寺における伝統を汲んだものとみなされよう。

四 伝來

先述の通り、本像の確実な伝來は像底の銘記に記される情報以外は不明である。像底の銘記は、寛文九年（一六六九）に当時の醍醐寺座主高賢によつて修理を受け、金剛輪院に安置されたことを伝える。副島氏は、像底銘以前の伝來は不明としながら、『慶延記』の時点では上醍醐如意輪堂または准胝堂に安置されていた可能性を示唆された。¹⁹⁾杉田氏は、銘文中の「金剛輪院持从堂」を現在の三宝院弥勒堂（護摩堂）に比定された。加えて、本像が上醍醐より移されたものであると推測され、『慶延記』に記される上醍醐の如意輪觀音像を総覽し、法量から上醍醐准胝堂が安置場所であったとされた。その根拠として、『慶延記』では像の髪際高を記録した可能性を指摘されている。²⁰⁾それでは、本像はどの堂宇に安置されていたと考えられるだろうか。

本節では、主に杉田氏の先行研究に導かれながら検討を行いたい。本像は保存状態が良好ではない点が他の上醍醐伝來の諸像と共通する。また、醍醐寺外から等身以上の像を移動させ修理を行う可能性は想定しづらいため、筆者も

本像が上醍醐に伝来していたと考る。副島氏は、高賢の師義演が上醍醐の仏像を下醍醐に移動させ修理していたことを指摘されており、本像の修理事業も高賢がそれを継承したものとみられる。

『慶延記』によれば、上醍醐には准胝堂、如意輪堂、觀音堂、念覺院に各一軀、延命院に二軀と五軀の如意輪觀音像が安置されていた。⁽²²⁾ 杉田氏が指摘するように、如意輪堂、念覺院の両像は近世時の伝来が異なるため本像には該当しない。⁽²³⁾ これらに加えて、觀音堂像は、注記がなく、当初より觀音堂へ安置する目的で造像されたと考えられ、制作の上限は本尊の千手觀音像と同時期とみなされる。したがって、本像の制作年代と合致しない。⁽²⁴⁾ 延命院像は、津田徹英氏によつて、『密集血脈惣統記』等の記録にあらわれる 聖宝、元果の造立と伝わる像であることが指摘される。⁽²⁵⁾ ただし、後述するように元果が本像のような図像を生み出した可能性は低いとみられ、延命院の元果造立像が本像に当たるとは考るに難い。

以上のことから、本像は准胝堂、もしくは延命院伝来像のうちの一軀に該当する可能性があると考えられる。両者のどちらであったかについては、今後検討を重ねていきたい。

五. 図像の淵源

本像の図像について、先行研究では主に二臂如意輪觀音との複合の可能性が指摘されてきた。⁽²⁶⁾ まずは、如意輪觀音関連經典を通覽し、そのいずれもが本像と類似しない事を確認する。その上で、先行研究を再検討したい。

如意輪觀音について説く經典は、『如意輪陀羅尼經』ほか八つが知られる（表1）。このうち、六臂如意輪觀音の所説をみると、坐法について説いたものは『摩尼陀羅尼』の「右足を三十二葉の蓮華上に置く」、『不空羈索神變真言

『經』の「結跏趺坐」、『攝無碍經』の「左を跏し右を趺す」のみである。ただし、日本では輪王坐が継承されてきた。また、二臂如意輪觀音の形像を説く經典類を見ると、本像に合致するものは存在しない。そこで、改めて先行研究で指摘される作例との影響関係を検討したい。

（1）石山寺本尊像

石山寺本尊像については、井上一稔氏による詳細な研究がある。井上氏は、正倉院文書にあらわれる石山寺本尊像は「觀音」として造像されたものであり、当初の尊格は如意輪觀音ではなかつたと結論づけた上で、如意輪觀音説の初出が十世紀末の成立とされる『三寶絵詞』であつたとされた。加えて、奈良時代の如意輪觀音信仰は、如意宝珠の威力を期待した陀羅尼信仰が中心で、尊像としての造形化は行われなかつた可能性を指摘された。石山寺本尊像の姿については、施無畏・与願印を結び左脚を踏み下げる姿から、右手に蓮華を持つ形へ変化した可能性を示された。²⁷⁾

今日に伝わる石山寺本尊像は、十一世紀末の再興像とみられ、その像容は、岩座上の蓮華に左足を踏み下げて坐り、左手は与願印とし右手で蓮華を持つ。当初の像容を伝えると目されているのが、『別尊雜記』所収の如意輪觀音および十世紀の制作とみられる旧御前立像である（挿図11）。その姿は、左手は垂下し与願印を、右手は屈臂し胸前で施無畏印を結ぶ。左脚を踏み下げる、右脚を横たえて坐る。本像とその姿を比較すると、石山寺本尊像は思惟手ではなく、右脚は足先を左大腿部に乗せずに真横に置く形をとる点で本像とは造形が異なるため、石山寺本尊像を参照・複合した可能性は低いと考える。

(2) 半跏思惟像

本像は、右手を頬に当て右膝を上げている点が注目される（挿図1）。杉田氏は輪王坐を参照したものとされたが、これは右肘を右膝に突く点もあわせ、むしろ半跏思惟像のかたちを忠実に取り入れたと見るべきであろう。

如意輪觀音の図像については、インド以来、思惟相を根底とし、初期から定着した可能性が朴享國氏によつて指摘されている。⁽²⁹⁾これを踏まえれば、日本でも思惟相を介して如意輪觀音と半跏思惟像とが結びつけられた可能性は十分に考えられる。

如意輪觀音の思惟手に関して、如意輪觀音関連經典に厳格な規定はない（表1）。しかし、その中で『大毘盧遮那成仏經疏（大日經疏）』には、第一・三指を伸ばし、他の指を屈する印相が説かれる。⁽³⁰⁾醍醐寺では、清瀧宮伝來像の思惟手が『大日經疏』の所説に依拠した可能性が指摘されており、醍醐寺の如意輪觀音像において、『大日經疏』所説の思惟手を重視していく可能性は高い。⁽³¹⁾

半跏思惟像の作例では、思惟手は五指を伸ばして指頭を頬に当てるもの、第四・五指を屈し、第二・三指の指頭を頬に当てるものの二通りが確認でき、後者が『大日經疏』所説に類似する思惟手であることが注目される。また、右膝を跳ね上げるように肘を支える作例も存在し（挿図12）、半跏思惟像を二臂の如意輪觀音と認識し、図像の淵源としていることを補強すると思われる。

(3) 半跏思惟形如意輪觀音像の誕生

前節では、造形面から本像の特異な図像表現には思惟手の印相を介した半跏思惟像との関わりがあつた可能性を指

摘した。新たに問題となるのは、半跏思惟像がどのように如意輪觀音とみなされるようになったのかである。

半跏思惟像の尊格については、先学による研究が蓄積されている。³²⁾ 朝鮮半島では、京都・慶雲寺菩薩半跏像の台座に山岳表現を伴うことから、半跏思惟像が弥勒菩薩として造像されたことが理解される。³³⁾ 日本における半跏思惟像の作例は、朝鮮半島以来の伝統を継承し、弥勒菩薩として造像されたとみられ、大阪・野中寺弥勒菩薩坐像の銘記等によつて裏付けられる。この認識は、京都・広隆寺弥勒菩薩像が寛平二年（八九〇）成立の『広隆寺資材交替実録帳』に「金色弥勒菩薩像 一軀」と記録されることから、九世紀末の時点においても継承されていたとみてよい。³⁴⁾ また、日本では、奈良時代の時点で如意輪觀音関連經典のほとんどがもたらされていたことが指摘されている。³⁵⁾ ただし、『大日經疏』は空海が請來したものであり、井上氏の奈良時代における如意輪觀音信仰についての指摘を踏まえれば、奈良時代から半跏思惟像が如意輪觀音として認識されていたとは考えにくい。ではどのようにして半跏思惟像は如意輪觀音とみなされたのであろうか。

まずは、弥勒菩薩と如意輪觀音の同体説を検討する。賴瑜（一二二六～一三〇四）記『十八道口訣』および『秘鈔口決』如意輪法条には、当時の三井寺流には如意輪觀音と弥勒菩薩を同体とする慣習があり、実任（一〇九七～一一六九）の口訣でも弥勒と如意輪を同体とみなす旨を述べる。³⁶⁾ このことから、十三世紀の時点では、弥勒菩薩と如意輪觀音を同一視する見解があつたと考えられる。しかし、賴瑜以前に如意輪觀音と弥勒菩薩を結びつける史料は管見の限り見いだせない。

一方で、半跏思惟形の如意輪觀音像については、聖德太子信仰との関わりから研究が行われてきた。内藤藤一郎氏は、半跏思惟像が弥勒菩薩像として造像された前提に立ち、平安時代以降に聖德太子が觀音の化身として信仰を集めることに当たつて如意輪觀音として認識されるようになつた可能性を指摘された。³⁹⁾ 源豊宗氏は、日本で受容された如意輪

觀音が右肘を膝と接着させ思惟の相をとる点で類似しており、半跏思惟像を誤って如意輪觀音とみなしたとの見解を示された。⁴⁰⁾

半跏思惟像の如意輪觀音化について、清水紀枝氏は、十二世紀後半に編まれた『別尊雜記』所収の四天王寺金堂本尊像が半跏思惟形の如意輪觀音の初例であり、『別尊雜記』の編纂には醍醐寺と縁の深い僧侶が関係した可能性を指摘された。さらに、石山寺本尊像が先行する二臂半跏形の如意輪觀音像として存在した前提に立ち、醍醐寺内でも特に石山寺流の僧侶が大きく関与した可能性を示された。⁴¹⁾

ここで問題は、半跏思惟像が如意輪觀音とみなされる以前に、石山寺本尊像系の図像が如意輪觀音とみなされていたという指摘である。經典に説かれる二臂の如意輪觀音の形像は、石山寺像のそれとは一致しない（表1）。さらに、石山寺本尊像は当初、施無畏・与願印を結んだ姿であり、如意輪觀音の標識となる宝珠、あるいは思惟の姿勢を具えていない。

本像の造形から、半跏思惟像が思惟手を介して如意輪觀音とみなされていた可能性を想定できるならば、図像的に徑庭のある石山寺本尊像が先に如意輪觀音として認識されたと考えるよりは、むしろ半跏思惟像を如意輪觀音とみなす認識の影響を受けて石山寺像が後発で如意輪觀音とされるようになつたと考えるべきではなかろうか。

六・図像と僧侶

これまで、本像の制作年代および特異な図像について考察した。本章では、本像の図像表現を編み出した人物について引き続き検討を重ねる。

(1) 先行研究の再検討

先行研究では、觀賢の弟子で石山寺を中心に活動した醍醐寺僧・淳祐（八八〇—九五三）が閑守したとする考えが主流である。その根拠として、淳祐が『聖如意輪觀音念誦次第（如意輪念誦次第）』において六臂を六道に見立て、六觀音を当てるといった独自の如意輪信仰を持つていたことに加え、石山寺本尊が半跏像ながら如意輪觀音とみなされることが挙げられてきた。⁽⁴²⁾ 淳祐は、延長三年（九二五）に般若寺で觀賢から灌頂を受け、天暦二年（九四八）に僧綱に補任され、同七年に入寂した。⁽⁴³⁾ また、淳祐は醍醐寺座主に推挙されながらもそれを辞退して石山寺に隠棲し聖教の書写をはじめ学僧として活動したことが知られる。⁽⁴⁴⁾

ここで改めて淳祐の著作から、彼の考えていた如意輪觀音図像を考えたい。『如意輪念誦次第』では、如意輪觀音の姿は「六臂身金色。（中略）右第一手思惟、第二手持如意宝。第三手持念珠。左第一手按山。第二手持蓮華。第三手持輪」と説かれる。これは『瑜伽法要』等に依拠しており、坐法についての所説はない。また、淳祐が編纂した密教図像集として知られる『石山胎藏七集』では、如意輪觀音の姿は「六臂の姿で左足裏上に右足を乗せる」と説かれ、胎藏曼荼羅中の六臂輪王坐の形とされる。⁽⁴⁵⁾

また、筆者は石山寺に伝来する如意輪觀音菩薩坐像（挿図13）に注目する。石山寺像は六臂輪王坐の姿であり、その造形には淳祐の法脈が関与した可能性が指摘されている。⁽⁴⁷⁾ また、淳祐の師、觀賢は独自の經典理解とそれを忠実に造形化することを重視していた。⁽⁴⁸⁾ 石山寺像が現図胎藏曼荼羅系の図像であったことを思えば、淳祐は師の觀賢由来の図像を重視していたとみなされるだろう。密教では、「瀉瓶（師から弟子へと法を余すことなく伝授すること）」が重視されたことから、本像の図像が繼承されなかつたのは、醍醐寺の中心的な法脈によつて考案された図像ではなかつ

たためと推察される。十世紀後半以降の醍醐寺では、淳祐の弟子を含む觀賢の法脈が座主位を相承するようになる。その中で本像と同様の図像が継承されていないことも淳祐の法脈によつて生み出された図像ではないことの証左となるだろう。同様に、淳祐の正嫡でその後の醍醐寺の法脈に多大な影響を与えた元果も、この図像の発生に関与したとは考えにくい。

以上、本像の図像表現が淳祐の法脈によつて発生した可能性が低いことを指摘した。それでは、十世紀第二四半期の醍醐寺では、どのような人物が想定できるであろうか。

（2）醍醐寺と僧侶

聖宝は、延喜七年（九〇七）に醍醐寺の運営を高弟の觀賢・延敝（えんじょう）に委嘱し、延喜九年に入寂した。聖宝没後は觀賢が醍醐天皇御願事業を完遂し、醍醐寺は延喜十三年に定額寺となつた。また、延喜十九年には座主、三綱、十禪師を設置し、醍醐寺の整備に尽力した。⁽⁴⁹⁾

觀賢が延長三年（九二五）に没すると、醍醐寺座主位は聖宝門弟によつて相承される。觀賢の後継は延敝であつた。延敝の没後、延性が座主となつたが、一年ほどで寂してしまつ。その後に醍醐寺座主に就いたのが貞崇であつた。貞崇以降の座主位は、觀賢の弟子が相次いで就任し、聖宝その人の弟子筋からは離れてゆく。觀賢没後から貞崇の座主就任までの間は、史料が現存しておらず判然としないが、延敝、延性は定住僧のうち上座二人であつた。彼らの後に貞崇は座主位に就任し、最後に聖宝の弟子で座主となつた点が注目される。

ここで、筆者は貞崇の存在に注目する。貞崇は、貞觀八年（八六六）左京三善氏の生まれで、貞觀寺惠宿のもとで密教を学んだ。昌泰二年（八九九）には、東寺廿僧を辞して金峰山に籠もり、三十年ほどを過ごしたという。延長

五年（九二七）から都に姿を現し、延長八年（九三〇）に醍醐寺座主に補任され、天慶六年（九四三）に同職を辞した。その後は奈良・鳳閣寺に隠棲し、翌年に入寂する。⁵⁰⁾ 醍醐寺は延喜十九年（九一九）に十禅師を設置するが、觀賢はその補任を聖宝門下の僧に限定している。その中に貞崇の名はなく、この時点では醍醐寺との関わりは薄かつたとみてよいだろう。⁵¹⁾

貞崇の評価について、本岡幹隆氏は、貞崇が醍醐寺座主位であった期間が下醍醐の造営期間と重なり、貴顯からの寄進が相次いだことから、貞崇が下醍醐整備および教団の組織化に寄与したとの理解を示された。⁵²⁾ また、竹居明男氏は貞崇の行実をまとめられた上で、醍醐天皇崩御前後から宮中で活動を行っていたことを明らかにされた。⁵³⁾ さらに、井上友莉子氏は、承平元年（九三二）の太政官符に注目し、貞崇が三論宗の年分度者を設置したことに、聖宝以来の顯密併修の正当性を主張し、寺院の発展を目指す目的があつたと理解された。⁵⁴⁾ 藤岡穰氏は、『吏部王記』の記述に注目し、貞崇が聖宝の作り出した藏王権現の解釈を拡大し、金峰山信仰を鼓吹しようとした可能性を示された。⁵⁵⁾ 近本謙介氏は、『吏部王記』に加え、『扶桑略記』の記述に着目し、貞崇の隠棲した鳳閣寺が金峰山に近いことから、金峰山信仰では貞崇をはじめとした聖宝法累の果たした役割が大きかつたとの見解を示された。⁵⁶⁾

以上の先行研究から、貞崇の性格は、真言僧、三論僧、修驗僧の三点に集約されると言えるだろう。先述の通り、貞崇ははじめ惠宿のもとで密教を学び、延喜二年（九〇二）に聖宝より受法したとされる。『本朝高僧伝』では、聖宝に受法してより三論を兼学しており、三論僧としての活動は比較的遅かつたものと考えられる。実際、同時代にあって他の醍醐寺座主は興福寺維摩会講師を務めた人物が多く、三論僧として活躍していたことが窺えるが、貞崇にそのような行実は確認できない。貞崇の師聖宝は延喜五年（九〇五）に佐伯氏建立の香積寺を譲り受け、顯密併修の東大寺東南院としたことが知られており、貞崇も東南院において三論教学を学んだものと思われる。

しかし、東大寺東南院は貞崇の法脈には継承されず、延暦やその弟子觀理へと受け継がれていった。東大寺東南院の継承に関しては、三論と真言を併修し、興福寺維摩会講師を務めていることが条件となっていた可能性が指摘されている。⁽⁵⁸⁾貞崇はその行実において興福寺維摩会講師を務めた記録はなく、三論僧として東大寺東南院を継承するまでの立ち位置ではなかつたとみられる。また、貞崇は延暦の入寂後に醍醐寺座主に補任されていることから、当時の東南院主は延暦上足で東南院僧都とよばれた觀理であつたと考えるのが自然であろう。貞崇が醍醐寺教団内の三論宗僧を支配する立場にいなかつたことを踏まえれば、彼の主な行実である三論宗年分度者の設置は、貞崇が醍醐寺に所属する三論僧への接近するためであつたと評価できるのではなかろうか。

また、貞崇が下醍醐の造営に関与した可能性については、史料では觀賢門弟の延賀が下醍醐造営の差配を行つたことが知られるものの、貞崇その人が関わつたことを示すものは存在しない。⁽⁵⁹⁾下醍醐の造営は觀賢在世時からの継続事業であったことからも、觀賢一門によつてなされたと考えるべきであろう。本岡氏が示された貴顕からの寄進が貞崇座主位時代に集中しているとの指摘も、醍醐天皇追善の寺院として機能し、新たに造営が行われる際も延賀に差配を委ねていることから、必ずしも貞崇その人の活動によるものであつたとは言い難く、醍醐寺内においての権勢もあまりなかつたと解される。

修験僧としては、後世の記録にはなるが鎌倉時代に成立した『金峰山草創記』では、金峰山に関わつた僧侶が列記される。⁽⁶⁰⁾その中において聖宝門弟は貞崇のみが名を連ねており、近本氏が評価するような初期金峰山における聖宝門弟の活躍は、貞崇とその周辺によるものであつたと考えられる。貞崇の行実の中で、金峰山での活動が長期にわたり、彼が隠棲した鳳閣寺が後世に至つて大峯修験の一大拠点となつたことも貞崇の行実を考える上で重要な要素であると言えよう。

以上、確認してきた通り、貞崇はその信仰において多様な側面を持っていたが、その中心は修驗道僧侶としてのものであつたと考えられる。観賢の没後、聖宝門弟によつて座主職が相承される中で、御願造営は観賢門弟の延賀が実質的な責任者として動いており、寺内では未だ観賢法脈の勢力が大きかつたと思われる。貞崇はこのような状況の中で聖宝門弟として座主職に就いたが、真言寺院としては観賢門下が、東大寺東南院では観理がその支配を行つており、寺内権力の掌握には至らず、貞崇が自身の正当性を示すためには、聖宝の教学を色濃く打ち出す必要があつた。その結果、真言寺院として発展していいた醍醐寺に三論宗の年分度者を受け入れたのではなかろうか。それと共に、本像の特異な図像を採用した可能性が考えられる。貞崇の没後、彼の法脈が醍醐寺に残らなかつたことも、本像の造形が再現性を持たなかつたことと軌を一にすると思われる。

これまで、醍醐寺で重視されていた思惟手の伝統を介して、貞崇が半跏思惟像のかたちを六臂の如意輪觀音と複合した可能性を指摘した。その着想をどこから得たのかについては、現段階では不明だが、以下に私案を述べてみたい。山岳信仰に関わる本尊について、佐和隆研氏は、山岳修驗に関わる地域に奈良時代の金銅仏が多く伝来することから、修驗者が金銅仏を斗敷の念持仏とした可能性を指摘されている。⁽⁶¹⁾ この前提に立てば、貞崇が山岳修驗の中で半跏思惟像に触れ、それらを参照した可能性を想定できるのではなかろうか。あるいは、貞崇が醍醐寺において聖宝の教学を重視したと見るならば、金峰山に安置された如意輪觀音像を参照した可能性も考えられよう。

聖宝が安置した金峰山像は、『醍醐寺根本僧正略伝』によれば、「居高六尺金色如意輪觀音」であつたとされる。⁽⁶²⁾ ただし、この像は延喜十二年（九二二）に大峰山寺が焼失したものとみられ、現存しない。⁽⁶³⁾

金峰山安置像について、石川氏は本像と同じ六臂・半跏踏み下げる姿を想定された。⁽⁶⁴⁾ 石川氏の想定される像容であつたかについては検討が必要だが、貞崇および聖宝が修驗僧としての性格を強く持つていたとすれば、金峰山安置

像の図像を持ち込んだ可能性は想定できる。また、貞崇と金峰山について、藤岡氏の指摘は示唆的である⁽⁶⁵⁾。貞崇が蔵王権現に関して伝説を付してその姿を広めたことに鑑みれば、焼失した金峰山安置像や斗藪の中でもみた半跏思惟像を土台として、貞崇自身の意図として図像を編み出した可能性もあるだろう。

以上、推測を重ねる部分も大いにあるが、本像の図像の参照元となつたものについての検討を行つた。現段階では、可能性を提示する以上の考察はできておらず、今後の課題としたい。

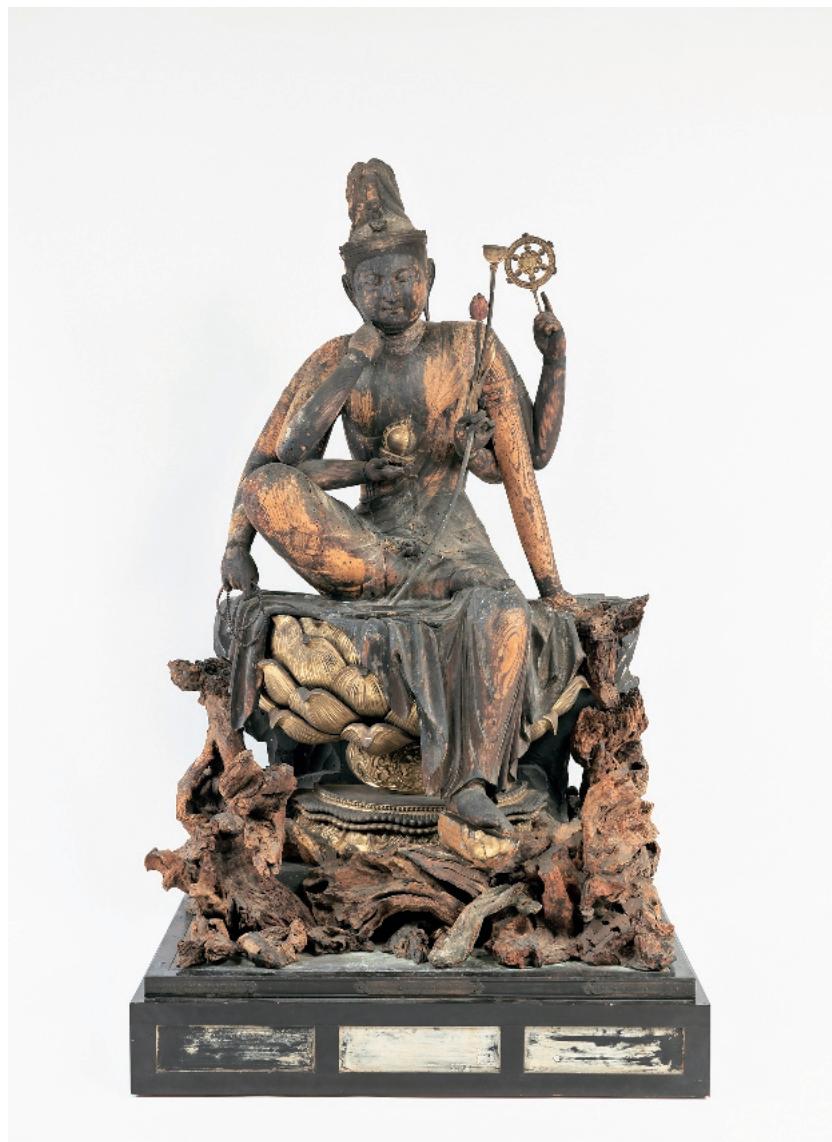
むすびにかえて

本稿では、醍醐寺旧蔵如意輪観音菩薩像について、制作年代が十世紀第一四半期に遡り、造像に関しては、従来指摘されてきた醍醐寺僧淳祐ではなく、当時の醍醐寺座主貞崇が深く関与し、醍醐寺における図像の一回性が法脈の断絶に起因する可能性をあわせて指摘した。

特異な図像表現については、先行研究にて指摘される半跏思惟像が参考された可能性を補強すると同時に、日本にのみ認められる二臂半跏形の如意輪観音の発生について、醍醐寺において認識されていた思惟手を介して行われた可能性を指摘するとともに、平安時代後期以降に如意輪観音とみなされる石山寺本尊像系の図像解釈の原型となつたという私案を提示した。ただし、半跏思惟形の如意輪観音像の誕生に際して、何が契機となつたかなど明らかにできなかつた課題も多く残る。

また、本像の造形は独自性が強く、醍醐寺作例の中での議論に終始してしまつた側面もある。今後は、本像を十世紀彫刻としてのみならず、広く密教彫刻史の流れの中に位置づけることを目指したい。

番号	経典名		腕の配置及び形		坐法				
①	如意輪陀羅尼經（如意輪陀羅尼）	如意輪陀羅尼經（如意輪陀羅尼）	左手執開蓮花	右手作說法相	結加趺坐	×			
②	如意輪菩薩瑜伽法要（瑜伽法要）	如意輪菩薩瑜伽法要（瑜伽法要）	第一手思惟	第二持意寶	第三持念珠				
③	觀自在菩薩如意輪瑜伽（如意輪瑜伽）	觀自在菩薩如意輪瑜伽（如意輪瑜伽）	左按光明山	第二持蓮手	第三手持輪	×			
④	如意輪菩薩觀門義注祕訣（觀門祕訣）	如意輪菩薩觀門義注祕訣（觀門祕訣）	第一手思惟	第二持意寶	第三持念珠				
⑤	觀自在菩薩如意輪瑜伽（如意輪瑜伽）	觀自在菩薩如意輪瑜伽（如意輪瑜伽）	左按光明山	第二持蓮手	第三手持輪	×			
⑥	觀世音菩薩如意摩尼輪陀羅尼念誦法（如意摩尼輪陀羅尼）	觀世音菩薩如意摩尼輪陀羅尼念誦法（如意摩尼輪陀羅尼）	第一手思惟	第二持意寶	第三持念珠				
⑦	不空羈索神變真言經 9（神變真言經）	不空羈索神變真言經 9（神變真言經）	左按光明山	第二持蓮手	第三手持輪	×			
⑧	不空羈索神變真言經 12	不空羈索神變真言經 12	第一手思惟	第二持意寶	第三持念珠				
⑨	攝無礙大悲心大陀羅尼經計一法中出無量義南方滿願補陀洛海會五部諸尊等弘誓力方位及威儀形色執持三摩耶幖幟曼荼羅儀軌（攝無礙經）	攝無礙大悲心大陀羅尼經計一法中出無量義南方滿願補陀洛海會五部諸尊等弘誓力方位及威儀形色執持三摩耶幖幟曼荼羅儀軌（攝無礙經）	左手作思惟相	中手執如意珠	下手執念珠				
20卷 131頁	20卷 288頁	20卷 271頁	20卷 203頁	20卷 217頁	20卷 208頁	20卷 213頁	20卷 193頁	19卷 343頁	大正藏
6	6	6	6	6	6	6	2	2	臂数
右慧思惟相 右智如意寶 右慧持數珠	左定按門山 左理執蓮花 左定持金寶	一手執輪 一手掌頰 一手執蓮花 一手持數珠 一手托右頰 一手把蓮花 一手按地	一手執輪 一手持數珠 一手執蓮花 一手執如意寶珠 一手執持數珠 一手按地	右手作金輪之手 中手執蓮花 下手按山 下手執念珠 下手執如意寶珠 下手按地	以右足三十二 葉蓮花爲坐	×	×	×	
仰左跏趺右	安住大蓮花	結加趺坐	結加趺坐	結加趺坐	葉蓮花爲坐	×	結加趺坐	×	



挿図1 半蔵門ミュージアム如意輪觀音菩薩坐像



挿図3 醍醐寺 千手觀音菩薩立像



挿図2 醍醐寺 五大堂伝来大威德明王像



挿図4 醍醐寺 藥師如來脇侍像（日光菩薩）



挿図6 半蔵門ミュージアム 如意輪觀音菩薩坐像 脚部



挿図5 醍醐寺 中院伝来
軍荼利明王立像



挿図7 中院伝来軍荼利明王像 脚部



挿図9 醍醐寺 胎藏大日如来像 頭部



挿図8 醍醐寺 帝釈天騎象像



挿図10 醍醐寺 如意輪觀音菩薩像（清瀧宮伝来）頭部



挿図11a 『別尊雜記』所収
石山寺本尊像



挿図11b 石山寺
如意輪觀音菩薩坐像



挿図13 石山寺 如意輪觀音菩薩像



挿図12 東京国立博物館 菩薩
半跏像（法隆寺献納 N-162）

注

(1) 大隅和雄「醍醐寺の歴史」有賀祥隆ほか編『醍醐寺大觀1』、岩波書店、二〇〇一年。

(2) 井上一稔『日本の美術』312 如意輪觀音・馬頭觀音、至文堂、一九九二年。

(3) 古木生「神呪寺如意輪觀音の構造」「史迹と美術」36、史迹美術同攷会、一九三三年。なお、神呪寺像は当初より左足を踏み下げるはいなかつた可能性も指摘されている。皿井舞「如意輪觀音菩薩坐像」東京国立博物館ほか編『仁和寺と御室派のみほとけ—天平と真言密教の名宝—』、読売新聞社、二〇一八年。

(4) 本像は近年の修理で、円筒形の舍利容器が納入されていたことが新たに確認された。蓋板が後補のため、納入品が後世のものである可能性は排除出来ないが、頭部に内割りが施されているにも関わらず髻に納入する点で注目される。

髻に舍利を納入する事例として想起されるのは、建久三年（一一九二）に快慶が制作した醍醐寺三宝院弥勒菩薩坐像である。三宝院像は本像と同様に髻中に舍利容器を納入する。副島氏は、髻に舍利容器を納入することについて唐・善無畏訳『慈氏菩薩略修愈誠念誦法（慈氏念誦法）』の所説に基づいた造像であった可能性を指摘している。（副島弘道「弥勒菩薩坐像 快慶作 三宝院護摩堂所在」有賀祥隆ほか編『醍醐寺大觀』1、岩波書店、二〇〇二年。）ただし、髻に舍利を納入することを説く儀軌は管見の限り『慈氏念誦法』以外に存在せず、如意輪觀音との関連性は認め難い。加えて、『慈氏念誦法』では、納入する舍利は七粒と説かれ、本像のそれとは異なる。

(5) 像底に貼り付けられた板の底面に朱漆で「此尊像去／寺乞請於／修覆／金剛輪院／持仏堂安／置之／於御供養□／東寺長者檢／校醍醐寺座主／法務大僧正／高賢開眼執／行之所也／寛文九己酉年十月十七日成身院法眼空朝奉寄進之」の銘記が書かれる。なお、本像の保存状態および像内納入品については、『如意輪觀音菩薩像一軀 修理報告書』、明古堂、二〇二三年を参照した。また、二〇一二年十月および二〇一三年十一月に実見を行い、その際の知見に基づく。

(6) 安藤更生「醍醐の如意輪と薬師像」東洋美術研究會編『醍醐寺の研究 東洋美術特輯』、飛鳥園、一九三〇年。

(7) 佐和隆研「密教の寺 その歴史と美術」、法藏館、一九七四年。

(8) 注(2)井上書籍。

(9) 副島弘道「11如意輪観音踏み下げ像」総本山醍醐寺、日本経済新聞社編『祈りと美の伝承 醍醐寺展 秀吉・醍醐の花見四〇〇年』、日本経済新聞社、一九九八年。

(10) 水野敬三郎「醍醐寺の彫刻」有賀祥隆ほか編『醍醐寺大觀』一、岩波書店、二〇〇二年。

(11) 杉田美沙紀「醍醐寺如意輪観音半跏像と十世紀前半の彫刻」『密教図像』37、密教図像学会、二〇一九年。

(12) 注(6)安藤論文。

(13) 石川知彦「大峯山で祀られた尊像—如意輪観音三尊像をめぐって—」『山岳修驗』52、山岳修驗学会、二〇一三年。

(14) 清水紀枝「院政期真言密教をめぐる如意輪観音の造像と信仰」早稲田大学論文リポジトリ、二〇一二年。

(15) 注(11)杉田論文。

(16) 注(2)井上書籍。

(17) 津田徹英「醍醐寺五大明王像（靈宝館所在）の伝来とその造像」『平安密教彫刻論』、中央公論美術出版、二〇一六年。

(18) 藤岡穰「18帝釈天騎象像」大阪中之島美術館、日本経済新聞編『開創1150年記念 醍醐寺国宝展』、日本経済新聞社、二〇二四年。

(19) 注(9)副島解説。

(20) 注(11)杉田論文。ただし、「慶延記」における法量の記述は不正確な部分が多く、さらに髪際高で計測していらない事例も認められるため、直ちにこれらを結びつけることは躊躇される。

(21) 副島弘道「座主義演と醍醐寺金剛輪院の仏像」『美学・美術史学科報』30、跡見学園女子大学美学美術史学科、二〇〇二年。

(22) 「醍醐寺新要録」卷一如意輪堂条。京都府教育委員会『醍醐寺新要録』上、田中文功社、一九五一年に依る。

(23) 注(11)杉田論文。

(24) 副島弘道「木造千手観音立像」副島弘道編『醍醐寺の仏像』第二巻 菩薩、勉誠出版、二〇一九年。

(25) 津田徹英「醍醐寺如意輪観音像考」『平安密教彫刻論』、中央公論美術出版、二〇一六年。

(26) 注(12)(13)(14)参照。

(27) 井上一稔「奈良時代の「如意輪」観音信仰とその造像—石山寺像を中心にして」『美術研究』35、東京文化財研究所、一九九二年。

(28) 注(11)杉田論文。

(29) 朴享國「如意輪觀音の成立と展開」『佛教藝術』262、佛教藝術学会、一〇〇一年。

(30) 大正藏三九卷七四四頁。「思惟手謂稍屈地水指向掌。餘三指散舒三奇杖稍側頭。屈手向裏。以頭指指頰」「思惟の手は、謂く稍地水指を屈して掌へ向け、餘の三指散じ舒べて、三奇杖の如し、稍しく頭を傾け、手を屈して裏を向け、頭指を以て頰を指せ」(読み下しは津田徹英「醍醐寺如意輪觀音像考」『平安密教影刻論』、中央公論美術出版、二〇一六年に依る)

(31) 注(25)津田論文。

(32) 中国における半跏思惟像の尊名については、石松日奈子氏の研究がある。石松氏は、半跏思惟像が「太子思惟像」あるいはただの「思惟像」であった前提に立ちながら、六世紀以降に菩薩半跏像の作例中で施無畏印を結ぶ作例が出現することに注目された。施無畏印を結び半跏する弥勒像と半跏思惟像が図像交錯するなかで、朝鮮半島における半跏思惟像を弥勒菩薩とする信仰へと展開した可能性を示された。(石松日奈子「弥勒像坐勢研究—施無畏印・倚坐の菩薩像を中心にして」『MUSEUM502』、東京国立博物館、一九九三年。)

(33) 藤岡穰「京都・妙傳寺と兵庫・慶雲寺の半跏思惟像」『東アジア仏像史論』、中央公論美術出版、一〇二二年。

(34) 大西修也「韓国半跏思惟像の尊格について」『日韓古代彫刻史論』中国書店、二〇〇二年。岩崎和子「弥勒信仰の形」(井手誠之輔、朴享國編『アジア仏教美術論集 東アジアVI』中央公論美術出版、二〇一八年など。

(35) 国立公文書館デジタルアーカイブ (<https://www.digital.archives.go.jp>) を参照。これらの内一体が「泣き弥勒」に当たるとの指摘がある。注(14)清水論文。

(36) 石田茂作「寫經より見たる奈良朝佛教の研究」、東洋文庫、一九三〇年。

(37) 注(27)井上論文。

(38) 真言宗全書刊行会『真言宗全書』第28、一九三三年に依る。

(39) 内藤藤一郎「夢殿秘仏と中宮寺本尊」東洋美術研究会、『東洋美術』四、五、六、八、飛鳥園一九三〇～三一年。

(40) 源豊宗「美術史雜記—中宮寺本尊と我国の半跏思惟像」仏教美術社、『仏教美術』一八、飛鳥園、一九三一年。

(41) 注(14)清水論文。

(42) 注(14)清水論文。

(43) 『五八代記』、『石山寺座主伝記』、『両部大教伝來要文』、『血脉類集記』、『醍醐報恩院血脉』、『諸門跡譜』の記述による。『大日本史料』天慶七年七月二日条を参照。

(44) 密教辭典編纂会編『密教大辭典』第三卷、法藏館、一九七九年。一一〇八頁。

(45) 葦原寂照校『聖如意輪觀自在菩薩念誦次第』、太融寺刊行に依る。「前略」宝蓮華變為本尊。六臂身金色。(中略)右第一手思惟。第二手持如意寶。第三手持念珠。左第一手按山。第二手持蓮花。第三手持輪。(後略)

(46) 『大正新脩大藏經 図像第一卷』一四三頁「如意輪菩薩(中略)紫金色。六臂。右第一手思惟手。次手持寶。次手持念珠。左第一手按山。次手持蓮華。次手捧金輪。左足掌上立右足。坐赤蓮華。後本圖坐白蓮華也。」(傍線は筆者が補う)

(47) 井上一稔「新出・石山寺木造如意輪觀音坐像をめぐつて」『博物館学年報』35、同志社大学博物館学芸員課程、一〇〇三年。

(48) 注(30)津田論文。

(49) 注(1)大隅論文。

(50) 『東寺長者補任』『僧綱補任』『醍醐寺座主次第』『密宗血脉抄』『本朝高僧伝』の記述による。『大日本史料』天慶七年七月二十三日条を参照。

(51) 延喜十九年九月十七日官蝶。中島俊司校訂『醍醐雜事記』、醍醐寺、一九三二年に依る。

(52) 本岡幹隆「貞崇伝小考」『印度學佛教學研究』28、日本印度學仏教學會、一九八〇年。

(53) 竹居明男「道賢上人冥途記」・『日藏夢記』備考(続) 醍醐天皇崩御前後・醍醐寺・僧貞崇(中略)両書が「隠した」もの『人文学』¹⁷⁴、同志社大學人文學會、二〇〇二年。

(54) 井上友利子「貞崇と空海の虚空藏求聞持法修学説話」『人間文化研究』33号、名古屋市立大学、二〇一〇年。

(55) 藤岡穰「伝説の尊像、藏王権現の成立と展開」『東アジア仏像史論』、中央公論美術出版、二〇二一年。

(56) 近本謙介「平安時代の東大寺における修驗と淨土教—聖宝と永觀を中心にして—」『ザ・グレイトブッダ・シンボジウム論集第11号 論集 平安時代の東大寺—密教興隆と末法到来のなかで—』、東大寺、二〇一四年。

(57) 『類聚符宣抄』延喜五年七月五日条。

(58) 横内裕人「平安期東大寺の僧侶と学問－特に院政期の宗と院家をめぐつて－」『ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集』第11号 論集 平安時代の東大寺－密教興隆と末法到来のなかで－、東大寺、二〇一四年。また、東寺觀智院本・仁海筆『密教師資付法次第千心』中の「僧正聖授法弟子卅五人」名簿には、貞崇は延暦よりも上座にいながら東南院を継承していくことを横内氏の指摘を補強するものである。

(59) 『吏部王記』承平元年四月二十日条および同年六月一日条。なお、津田氏は延賀が下醍醐造営に関わったことについて、観賢の遺志を承けてのものであったと評価された。津田徹英「醍醐寺伽藍整備期の造仏工房」「平安密教彫刻論」、中央公論美術出版、二〇一六年。

(60) 京都大学本を参照。京都大学貴重資料デジタルアーカイブ (<https://rmdakulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00019002>) にて閲覧。

(61) 佐和隆研「山岳信仰の美術」「佐和隆研著作集」第三巻 仏教美術論、法藏館、一九九七年。

(62) 有賀祥隆ほか編『醍醐寺大觀』一、岩波書店、二〇〇二年、一四五頁を参照。

(63) 『扶桑略記』寛治七年九月二十日条。『大日本史料』寛治七年九月二十日条を参照。

(64) 注(13)石川論文。

(65) 注(55)藤岡論文。

〔図版出典〕

挿図 1 半藏門ミュージアムより提供。挿図 2・5・7 副島弘道編『醍醐寺の仏像』第三巻 明王、勉誠出版、2002年より転載。挿図 3・10 副島弘道編『醍醐寺の仏像』第二巻 菩薩、勉誠出版、2001年より転載。挿図 4・9 副島弘道編『醍醐寺の仏像』第一巻 如来、勉誠出版、2001年より転載。挿図 6 藤岡穰氏より提供。挿図 8 有賀祥隆ほか編『醍醐寺大觀』、岩波書店、2002年より転載。挿図 11a 奈良国立博物館編『観音のみでら』石山寺展図録、2001年より転載。

挿図 11b 大正新脩大藏經刊行会『大正新脩大藏經 図像第3巻』、大藏出版、1932年より転載。挿図 12 e 国宝 ([https://emuseum.nich.go.jp/top?langId=ja&webView="](https://emuseum.nich.go.jp/top?langId=ja&webView=)) より転載。挿図 13 大津市歴史博物館『企画展 石山寺と湖南の仏像－近江と南都

を結ぶ仏の道』、二〇〇八年より転載。

〔付記〕

本稿は令和六年一月に大阪大学大学院に提出した修士論文に加筆修正を加えたものです。論文執筆にあたっては、指導教員である大阪大学大学院藤岡穰教授、青山学院大学津田徹英教授より終始ご指導を賜り、ご助言いただきました。また、作品調査および写真掲載にあたり、所蔵者である半蔵門ミュージアム、山本勉館長にご高配を賜りました。末筆ながら、謹んで御礼申し上げます。

（大学院博士後期課程学生）

SUMMARY

Study of the Seated Cintamani-cakra Bodhisattva in the Collection of
Hanzomon Museum (Formerly Owned by Daigoji Temple)

Daigo MACHIDA

The statue of Cintāmaṇicakra Avalokiteśvara (Nyoirin Kannnon), formerly housed in Daigoji Temple, exhibits a unique iconography. Although the statue is considered to make back to the 10th century, its position in the history of sculpture has not been established. Therefore, this study examines the production date and attempts to analyze its unique iconographic expression including monks.

Regarding the production date, the slender body type of the statue resembles that of the Daiitoku Myōō statue in the Godai-do Hall of Daigoji Temple, created around Engi 13 (913). However, the expression that reduces the fleshiness of the upper body is akin to the Sahasrabhuja Avalokiteśvara statue of Daigoji Temple, produced during the Tentoku era (957-961). The design of the drapery is similar to the Five Great Wisdom Kings statues of the Chuin Hall in Daigoji Temple, made before Encho 3 (925). While the overall form is similar to examples from the first quarter of the 10th century, elements such as the reduction of fleshiness suggest a slightly later period. Therefore, it is considered to have been produced around the second quarter of the 10th century.

The iconographic expression of the statue has been noted for its relationship with the Bodhisattva statue of Ishiyama-dera Temple, said to be Nyoirin Kannon. However, the Ishiyama-dera statue is not in a contemplative pose, which marks a significant difference. It is considered to be related to the form of a statue of a figure sitting contemplatively in the half-lotus position. Among the examples of half-seated contemplative statues, some exhibit hand gestures similar to those of the Nyoirin Kannon. This suggests the possibility that the half-seated contemplative statue might have been recognized as a Nyoirin Kannon before the Ishiyama-dera statue was identified as such.

Regarding the person who conceived the iconography of this statue, the author focuses on the monk Jōsu (866-944). Although he became the fourth abbot of Daigoji Temple, he is believed to have implemented policies close to the teachings of Shobo. It is suggested that the iconographic expression of this statue might have been intended to assert his own religious lineage."